講　演

※「浮世草子『風流神代巻』―舌耕の可能性」　山本　卓

〈要旨〉

木村探元『三暁庵談話』に、都の錦が徒然草を神道と仏道の両様に講釈したとの記事が見える。このうち「神道にて講釈」の部分に注目すると、都の錦の著作浮世草子に神道や神代に拘泥する表現が頻出することに気づく。その最たるものが自作『風流神代巻』（元禄十五年刊）であろう。『風流神代巻』の主題のひとつ夫婦和合の問題を考えてみると、まずは、西鶴好色物の影響が考えられよう。しかし、少し時代が下ると増穂残口『艶道通鑑』（正徳五年序）に近似する言説が見えるのである。さらに、中野三敏氏『江戸狂者傳』は、残口八部の書の「中でも特に『艶道通鑑』の持つ内容に心ひかれた志道軒が、持ち前の弁舌に鞭うって、身過ぎも兼ねて十二文の投銭に身を屈しながら説き出したのが、彼の狂講の始まりだった」とされた。

中村幸彦氏「不風流志道軒伝」（『中村幸彦著述集』十）は、明和九年の『風流神代巻』を志道軒狂講の口吻を写すものとされた。これに対し中野氏前掲書は、本書を「都の錦の『風流神代巻』の本文をそのまゝ用いて、志道軒自序なるものを附した、全くの偽書である」とされた。

しかし、明和九年の時点で、このような偽書が存在することは、『風流神代巻』を志道軒の著作としても通用すると判断した

人物が実在したことの証左にはなる。偽書『風流神代巻』の背後には、偽書とはいえ、それなりの説得力を持って志道軒の狂講が実在したのである。

ここで議論を都の錦作『風流神代巻』に戻すならば、都の錦作『風流神代巻』（元禄十五年）の背後には都の錦の神道講釈が存在したのではないかとの仮説に想到するのである。